

竹生島

禅竹作

前

ワキ 官人

ワキヅレ 随行者

シテ 漁翁

ツレ 女

後

ツレ(天女) 弁財天

シテ 龍神

地は 近江

季は 三月

ワキ、ツレ次第

「竹に生るゝ鶯の。く。竹生島詣いそがん。

詞

「そもくこれは延喜の聖代に仕へ奉る臣下なり。

さても江州竹生島の明神は。靈神にて御座候ふ間。

此たび君に御暇を申し。唯今竹生島に参詣仕り

候。

道行

「四の宮や。河原の宮居末はやき。く。名も走井

の水の月。くもらぬ御代に逢坂の。関の宮居を伏

し拝み。山越ちかき志賀の里。鳩の浦にも着きに

けり。く。

詞

「急ぎ候ふほどに。鳩の浦に着きて候。あれを見れ

ば釣舟の来り候。しばらく相待ち便船を乞はゝや

と存じ候。

シテサシ

「おもしろや頃は弥生の半なれば。波もうらゝに海

のおも。

ツレ

「霞みわたれる朝ぼらけ。

シテ一声

「のどかに通ふ船の道。

二人「憂きわざとなき心かな。

シテサシ「これは此浦里に住みなれて。明暮はこぶ鱗の。

二人「数を尽して身一つを。助けやせんとわび人の。隙も波間に明けくれて。世をわたるこそ物うけれ。

下歌「よし／＼同じわざながら。世にこえたりな此海の。

上歌「名所おほき数々に。／＼。浦山かけてながむれば。

志賀の都花園。昔ながらの山桜。真野の入江の船よばひ。いざさしよせて言問はん。／＼。

ワキ詞「いかに是なる船に便船申さうなふ。

シテ詞「これは渡し船にてもなし。御覧候へ釣船にて候ふよ。

ワキ「こなたも釣船と見て候へばこそ便船とは申せ。これは竹生島にはじめて参詣の者なり。誓の船に乗るべきなり。

シテ「げに此所は霊地にて。歩みを運び給ふ人を。とかく申さば御心にも違ひ。又は神慮もはかりがたし。

ツレ「さらばお船を参らせん。

ワキ「うれしやさては迎の船。法の力とおぼえたり。

シテ詞「けふは殊更のどかにて。心にかゝる風もなし。

地「名こそさゝ波や。志賀の浦にお立あるは。都人か
いたはしや。お船にめされて浦々をながめ給へや。

地「処は海の上。く。国は近江の江にちかき。山々
の春なれや。花はさながら白雪の。ふるか残るか
時しらぬ。山は都の富士なれや。なほさえかへる

春の日に。比良の嶺おろし吹くとても。沖こぐ船
はよも尽きじ。旅のならひの思はずも。雲井のよ
そに見し人も。同じ船に馴衣。浦をへだてゝ行く
ほどに。竹生島も見えたりや。

シテ「緑樹かげ沈んで。

地「魚樹にのぼるけしきあり。月海上に浮んでは。兎
も波を走るか。おもしろの島のけしきや。

シテ詞「舟が着いて候ふ御上り候へ。

ワキ詞「あらうれしややがて神前へ参り候ふべし。

シテ「この尉が御道しるべ申さうずるにて候。これこそ
弁財天にて候へよくく御祈念候へ。

ワキ「承り及びたるよりもいやまさりて有りがたう候。
不思議やな此島は。女人禁制とこそ承りて候ふに。
あれなる女人は何とて参られて候ふぞ。

シテ「それは知らぬ人の申しごとにて候。かたじけなく
も此島は。九生如来の御再誕なれば。殊に女人こ

そまゐるべけれ。

ツレ「なふそれまでもなきものを。

地「弁財天は女体にて。く。その神徳もあらたなる。
天女と現じおはしませば。女人とて隔てなし。たゞ
知らぬ人の言葉なり。

クセ「かゝる悲願をおこして。正覚年ひさし。獅子通王
のいにしへより。利生さらに怠らず。

シテ「げにくくかほど疑ひも。

地「荒磯じまの松陰を。たよりによする海人小舟。われは人間にあらずとて。社壇の扉をおしひらき。御殿に入らせ給ひければ。翁も水中に。入るかと思ししが白波の。立ち返りわれは此海の。あるじぞと言ひすてゝ。また波に入らせ給ひけり。(中入) 御殿しきりに鳴動して。日月ひかりかゝやきて。山の端出づる如くにて。あらはれ給ふぞかたじけなき。

天女「そもくこれは。此島に住んで神をうやまひ国をまもる。弁財天とはわが事なり。

地「その時虚空に音楽きこえ。く。花ふりくだる春の夜の。月にかゝやく乙女の袂。かへすぐもおもしろや。(舞)

地「夜遊の舞楽も時すぎて。く。月すみわたる海づらに。波風しきりに鳴動して。下界の龍神あらはれたり。龍神湖上に出現して。く。ひかりもかゝ

やく金銀珠玉を。かのまればとに捧ぐるけしき。
ありがたかりける奇特かな。

シテ「もとより衆生済度の誓ひ。

地「もとより衆生済度の誓ひ。様々なれば。或ひは天

女の形を現じ。有縁の衆生の諸願を叶へ。又は下
界の龍神となつて。国土を静め誓ひを現はし。天
女は宮中に入らせ給へば。龍神はすなはち湖水に
飛行して。波を蹴立て水を返して。天地に群がる

大蛇の形。天地に群がる大蛇の形は。龍宮に飛ん
でぞ入りにける。